

キャリアプログラムの開発に関する研究

—主体的に自己の生き方を考えることのできる生徒支援について—

高知県立春野高等学校 教 諭 大原 弥
高知県教育委員会事務局 指導主事 大原 信男

現在、高知県の高等学校への進学率は、97%を超えており、高等学校では生徒の能力、興味・関心、進路希望など、多様なニーズに応える必要性が増えている。

社会的な経験や知識が乏しい児童・生徒にとって、将来の目標を明確に確立し、進路選択を行うことは容易なことではない。多様な生徒をサポートし、生徒一人一人の進路実現を目指すためには、進路指導に関する教師の共通理解と生徒一人一人が自己を見つめ、自分の「生き方」「在り方」について考えることのできるプログラムが必要であると考え。

生徒自身が、進路実現に向けて目標や課題を早期発見し、将来の進路（生活）に対する意識を高めるために必要な支援プログラムについて研究した。

キーワード：進路指導、キャリア教育、早期離職率、連携、目的意識

1 はじめに

(1) 研究内容の方向づけについて

進学も就職活動もせずに卒業する生徒や早期離職する学卒者が、毎年多く存在し、現在大きな社会問題となっている。

多様化する現代社会のなかで、生徒一人一人の進路実現を目指すためには、学校教育における進路指導体制の充実が極めて重要である。

特に就職に関しては、短期間に自分に適合した仕事の選択を求人票から探し、職業を決定しなければならない。しかし、社会的に経験が乏しい生徒にとって、将来の進路決定は非常に難しく、不安な日々を過ごしていると思われる。これらをサポートするためにも、学校が果たす最も重要な役目である進路指導において、教師の共通理解と支援体制の確立が大切である。

従来の進路指導の在り方について考察し、生徒にとって効果的な進路指導とは何かについて探求することにした。

(2) 研究対象について

現在、高知県の高等学校への進学率は、97%を超えており、高等学校では生徒の能力、興味・関心、進路希望など、多様なニーズに応える必要性が増えている。各校においては、生徒一人一人の個性を最大限に伸ばさせるために、学習の選択幅をできる限り拡大して、特色ある学校づくりを推進している。

社会的な経験や知識が乏しい児童・生徒にとって、将来の目標を明確に確立させ、進路選択を行うことは容易ではない。

自分が就きたい、あるいは将来就きたくなるかもしれない職業に関する情報を多面的に獲得し、理解することは、キャリアを形成し、社会人としての自立意識を醸成する上で極めて重要である。

心身ともに発達段階の生徒達を支援するためにも、「好きなことは何か」「得意なことは何か」「大切にしていることは何か」といったことを自身に問いかけ、自分らしい生き方を探索してもらうことを原点にしている「キャリア教育」の実践が必要であり、将来に対する目的意識を持って学ぶ生徒の育成ができるキャリアプログラムの開発について研究を進める。

(3) キャリア教育の必要性について

多様な生徒をサポートし、生徒一人一人の進路実現を目指すためには、進路指導に関する教師の

共通理解と生徒一人一人の将来に対する目的意識の早期確立が必要である。そのためには、自己形成能力、情報活用能力等を高め、将来設計できる能力を身につけさせることが大切であり、生徒の生き方教育につながるキャリアプログラムを学校現場に普及していくことが必要だと考える。

2 研究目的

生徒一人一人が自ら考察し、活用できるキャリア学習ノートを作成することにより、進路実現に向けて目標や課題を早期発見し、自信を持って学校生活を送り、将来の進路（生活）に対する意識を高めることができるのではないかと考える。

3 研究内容

(1) 基礎研究

高等学校における進路指導の現状と課題

高等学校における進路指導は、出口の保障が最重要視されている。

しかし、生徒に対する進路指導は、生徒一人一人希望する進路が異なるため、多くの時間を必要とする。

特に就職に関しては、短期間に自分に適合した仕事の選択を求人票から探し、職業を決定しなければならない。そのため、高等学校卒業時における進路先決定指導となっている状況が多く見られる。

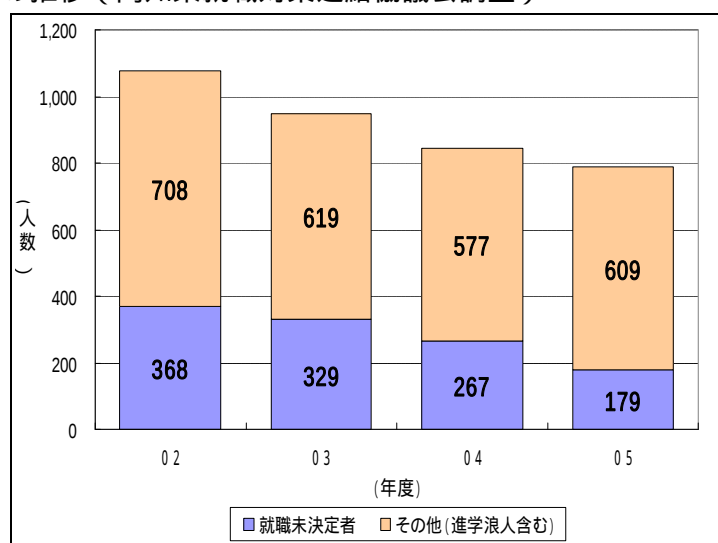
社会的に経験が乏しい生徒にとって、将来の進路決定は非常に難しく、不安な日々を過ごしていると思われる。これらをサポートするために、進路指導に関する教師の共通理解が重要であると考えられる。

高知県内の新規高卒者の進路未決定者の推移（高知県就職対策連絡協議会調査）

進学も就職もせずに高校を卒業した生徒が、毎年多く存在し、全国的に大きな社会問題になっている。

高知県においても例外ではなく、進路未決定のまま高校を卒業している生徒は毎年多く存在する。高知県の過去のデータを調査してみると、図1のような結果が出てきた。

昨年度3月末の統計の内訳として、5,741名の卒業生のうち、就職未決定者は（就職を希望していたが、未決定のまま卒業した生徒）179名（3.1%）、その他（就職も進学活動もせずに卒業、進学浪人を含む）生徒は609名（10.6%）存在する。



【図1】 県内公立高校の進路未決定者の推移

この2つを合計すると、788名の生徒が進路未決定のまま、高校を卒業していることになる。

将来の目標を持って卒業している生徒も存在するが、何の目的意識も持たず、ただ高校を卒業したという生徒が、問題になっている。

また、このような問題を、問題と意識していない生徒も多いのではないかと推察する。

そのためにも、将来に対する「目的意識」を持って学ぶ生徒の育成が重要であると考えられる。

新規高卒者の早期離職状況

過去の新規高卒者（全国）の離職率を検証してみると、毎年、1年目で約25%、3年目までに約50%の者が離職している状況が、図2より明らかになってきた。

これは、七五三現象といわれ、中学校を卒業して就職した7割、高校卒業で5割、大学卒業で3割の生徒が3年間の内に離職している割合を表す。

厚生労働省の「新規高卒者の就職離職調査」のデータからも、毎年、ほぼ同じ割合で早期離職していることが分かる。

高知県においては、さらに深刻な状況であり、離職率の高さが、図3からも読み取れる。

主な離職理由として、仕事のミスマッチや、対人関係により離職する割合が高くなっていることが分かってきた。

仕事に対するミスマッチを防ぐためにも、企業の求める人材と自分にあった仕事の適性などを把握する必要がある。

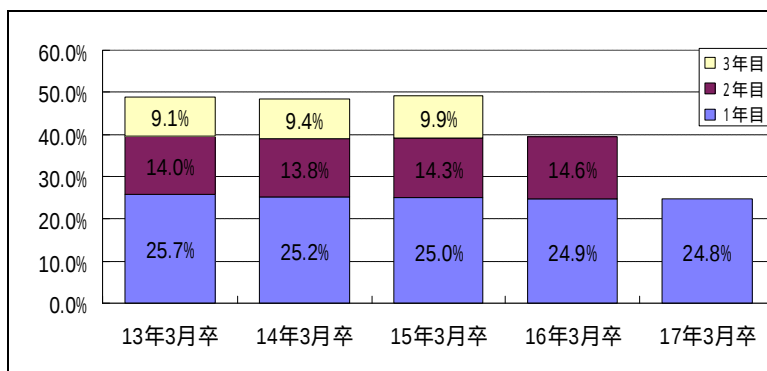
キャリア教育について

キャリア教育で身に付けさせたい能力として、文部科学省より報告されている「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議の報告書」（平成16年1月）では、「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み」の職業的（進路）発達に関わる諸能力の育成の視点から「4領域8能力」を提示している。

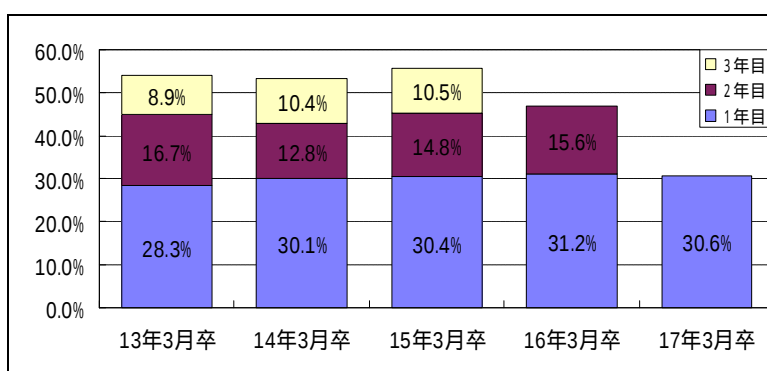
表1のように、キャリア教育によってつけたい、これらの4つの領域と8つの能力の育成を基本に、できる限り早い段階で身に付けさせることが大切である。

生徒一人一人が、将来に対する目的意識を持ち、自己の生き方や在り方について考える能力が必要とされる。

生徒の生き方教育に繋がるキャリアプログラムを学校現場に普及していくことが必要だと考える。



【図2】 新規高校卒業者の就職離職状況（全国）



【図3】 新規高校卒業者の就職離職状況（高知県）

【表1】 職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み

領 域	求める能力
人 間 関 係 形 成 能 力	自他の理解能力
	コミュニケーション能力
情 報 活 用 能 力	情報収集・探索能力
	職業理解能力
将 来 設 計 能 力	役割把握・認識能力
	計画実行能力
意 志 決 定 能 力	選択能力
	課題解決能力

(2) 所外における実態調査

各関係機関における聞き取り調査

就職未決定者や主に無業の若年者が、求職活動で直接関わりをもつ、ジョブカフェこうちやハローワークプラザはりまや、いの公共職業安定所などを訪問し、求職支援を始めとする各機関の仕事内容や果たす役割について情報を収集した。

求人状況や事業所に関する様々な情報を共有するためにも、各関係機関との連携が重要である。

また、学校現場では、生徒からの相談は日常的に発生しており、専門的なコーチングやカウンセリングスキルを教員も必ず身に付ける必要性を強く感じた。

事業所訪問の必要性

高知県経営者協会が主催する職場見学会や高知県工業会主催の企業訪問バスツアーに参加。

各事業所を訪問することにより、事業所の概要や仕事内容を確認するとともに、事業所の求める人財、新規高卒者の求人情報、離職率などについて現状を把握し、生徒に最新の情報を提供することができる。

各事業所とも、独自の経営理念を持っているが、事業所が求める人財については共通点が多くみられ、「明るく元気」「誰とでも会話ができる」「素直」など対人関係に関する内容が多く、特別な能力や技能よりも、社会人としての基本的な要素が求められていることが分かってきた。

また、早期離職率が比較的少ない事業所は、仕事に対するミスマッチが少なく、入社後の社員教育の指導も徹底されていると考えることができる。

進路指導上、生徒に仕事のミスマッチをさせないためにも、教員が各事業所に積極的に足を運び、仕事内容等を把握することが必要である。

就職フェア（大学、専門学校等対象）の現状

昨年度、就職でも進学でもなく卒業した大学生の割合は、約 25% と高く、大きな社会問題となっている。

実情を確認するために就職フェアへ参加したが、会場では、積極的に事業所へ自己PRする学生と、席に座ったまま何も行動しない学生、面接会場を早々に後にする学生が存在した。

行動しない学生に着目すると、行動しないのではなく、自分の将来に対する目的意識がなく行動できないように伺えた。

このような現状を考えると、できる限り早い時期に将来に対する目的意識を持たせる必要性和、高校におけるきめ細かな進路指導の充実が必要とされる。

高校生スキルアップ講習会（ビジネスマナー）の重要性

就職試験の事前対策として、各校が取り組みを行っているスキルアップ講習会がある。

就職試験の面接で必要とされることは、社会人としての身だしなみや態度、挨拶などの基本的なスキルであるが重要度は高い。

社会人の心構えとして、ビジネスマナーを学校現場に取り入れ、生徒自身に意識づけることが大切である。

また、社会生活を送るうえで必要なビジネスマナーは、コミュニケーション能力を高めるためにも必要な要素であるため、それらを理解し、実践することができる能力を身に付けさせることは必須である。

アサーション技法の活用

真の人間関係をつくる表現法として、アサーション（自己表現）がある。

アサーションの基本は、自分を大切にし、相手も尊重するという考え方であり、自分の気持ちや考えを率直に、直接的に表現し、同時に相手の立場への理解を示すことであるため、人間関係形成に大きく影響を及ぼす技法である。

アサーティブな態度を身に付けることにより、さらに充実した人間関係を築くことができるの

ではないかと考え、キャリア教育で必要とされるコミュニケーション能力を高める表現法のひとつとして有効に活用する。

キャリア教育推進地域への視察

キャリア教育推進地域の指定を受け、独自のキャリア教育の実践研究を行っている県内外の学校の授業や実践発表を聴き、生徒の取り組む姿勢や教師の授業展開方法、地域との連携の必要性を強く感じた。

キャリア教育を導入することにより、授業の方向性が確立され、教職員の組織力やクラスの仲間意識が強化されているようである。

あるクラスでは、発表者に対し、応援や賛同する手段として、クラス全員が拍手で認め合う方法をとっており、生徒自身が積極的に授業に参加することができるクラスづくりがあり、拍手の有効性を改めて強く感じた。

生徒一人一人を認め、居場所をつくり、クラス全員がひとつの目標に向かって取り組む雰囲気づくりが、見学した小・中学校では出来ている。

キャリア教育を推進している学校や地域の共通点は、生徒が自ら進んで挨拶ができ、お互いを認め合う優しい心が形成され、コミュニケーション能力の育成が行われているように想われる。

また、教職員の共通理解のもと、生徒を支援する組織力が強化されており、キャリア教育を実施する上で最も必要な要素のひとつであると考ええる。

トレーディングゲームの有効性

経済産業省の地域指定事業である起業家教育促進事業（株式会社ウィルシード）の小学生を対象としたトレーディングゲームを見学し、低学年におけるキャリア教育体験プログラムの有効性について調査した。

プログラム内容として、「主体性」「関係性」「社会性」「創造性」の4つを学習のねらいと位置づけ、自分の夢や社会貢献、いきいきとした人生を過ごすための「生きる力」を養うプログラムである。

小学生版では、社会に出ること、仕事をするとは何かを考えさせることを目標にしているが、体験プログラム自体は、小学生から社会人（マネージャー層）まで提供している内容である。

ゲーム終了時に振り返りを行うことにより、社会で必要とされる能力について理解を深めることができる。自分の課題に対し、確認することができれば、問題解決能力の向上へと繋がるのではないと思われる。

小学生が真剣なまなざしで取り組む姿勢や、豊かな発想力、想像力、協調性が短時間の内に身に付いていくのを目の当たりにし、このような体験プログラムが、できるだけ早い時期から学校現場に導入することができれば、人間関係形成能力や情報活用能力などを身に付けることができるのではないかと推察する。

(3) 実践研究

キャリア学習ノートの必要性

多様化する現代社会のなかで、様々な問題点や課題を克服するためにも、生徒一人一人が、将来に向けて目標や課題を早期発見し、自己を再評価しながら、あらゆる状況に対応するためのコミュニケーションスキルを高めると共に、将来の進路や生き方について考えるための手立てが必要だと考え、キャリア学習ノートの作成の研究に取りかかることにした。

これまでの様々な経験や学習を振り返り、生徒一人一人が、「自己理解」や「将来設計」「職業理解」「スキルアップ」などを中心に、自己を見つめ直すことを目的とする。

多様化した現代社会のなかで、社会が求める人材と、生徒一人一人の生涯目標が一致できれば、早期離職をはじめとする様々な問題解決に繋がるのではないかと考える。

そして、進路先を決定することが最終目的ではなく、生涯にわたるキャリアを形成していくた

めの基盤になればと考える。

キャリア学習ノートの作成

ア 高校生活をイメージさせる

高校生活を主体的に、また有意義に送るためには、入学当初に、1年間の学校生活の流れを理解することが必要ではないかと考える。

その中で、それぞれの果たす役割や目標を明確にさせ、意識する必要がある。

また、自己の行動を振り返るために、自己評価欄を設け、自己達成度を確認することができるのではないかと考える。

イ 自分のキャリアを考える

これまでの自分の人生を振り返るとともに、これからの将来を予測しながら、自己のキャリアプランを立てるシートを作成。

目先のイベントに自己のゴールを設定するのではなく、進学や就職した後を考え、10年後、20年後、50年後といった、将来の自己を常に意識しながら、日々を送ることが重要ではないかと考える。

ウ 今やるべきことを考える

将来の夢を叶えるための手段を考え、今やるべきことは何かを個々に考えさせるシートを作成。

やるべきことを先送りせず、今できることを考え、実行することの必要性を理解させる。

常に、現実を意識させることにより、モラトリアム型を作らないことが大切ではないかと考える。

エ 自他を分析する

自己の長所や行動の特徴を確認するシートを作成。

自己の性格を知り、他者を理解することで新たな自己を発見することができるのではないかと考える。

自分には、どのような長所や短所、行動の特長があるかを確認することで、自分の強みを再確認することができるのではないかと考える。

また、自分の短所を長所にリフレーミングしてもらうことにより、新たな自己を発見することができるのではないかと考える。

オ スキルを高める

基本的なビジネスマナーを身に付け、自己のスキルを向上させるために、心を伝えるお辞儀の仕方や敬語の種類、正しい言葉遣い、挨拶の重要性を学習する必要があるのではないかと考える。

実際に体験的な学習を取り入れることにより、自己のスキルを高め、社会人としての心得やマナーを身に付けることができるのではないかと考える。

カ 質問の仕方を考える

普段、何気なく行われている会話を確認し、質問の仕方によって相手とのコミュニケーションが変化することを学習する。

聴きたい情報を有効に引き出すために、「はい」や「いいえ」の一言で答えることのできる「閉じた質問」や、説明しなければ答えることのできない「開いた質問」を活用し、傾聴力や情報を収集する能力を高めることができるのではないかと考える。

キ 情報を集める

今日の情報化社会のなかで、様々な情報源の特性を理解するとともに、自分の知りたい情報を実際に収集し、考えるシートを作成。

正しいと思われる情報をいかに収集し、それらをもとに分析することが必要ではないかと考

える。

ク 仕事を知る

自己の仕事に対する考えや価値観を整理させるとともに、身近な職業人にインタビューを行うことにより、将来就くであろう「仕事」の重要性や役割について理解を深め、仕事に対するミスマッチを防ぐことができるのではないかと考える。

これらの各項目を基礎に、学習ノートを活用することで、主体的に、自己の将来に対する「生き方」や「在り方」について考え、行動することができれば、将来に対する目的意識が確立されるのではないかと考える。

4 今後の課題とまとめ

(1) キャリア学習ノートの有効性

キャリア学習ノートの項目を有効に活用するための検証まで至らなかった。

作成したノートを有効に活用するために、更に手直しを加えながら、まずは学校現場に持ち帰り、引き続き、有効に使えるプログラムの開発に努めていきたい。

(2) キャリア教育への認識

キャリア教育の学校現場における認識がまだまだ不足しているように思われる。

新たに何かをしなければならないという気持ちが先行し、実施にあたり負担を感じている雰囲気があるように感じる。

キャリア教育の理解を促進させるためにも、校内研修などを実施し、知り得た情報を共有し、共通理解のもとで生徒を支援していかなければならないと考える。

キャリア教育は、学校の全ての教育活動を通して推進しなければならない教育であるため、今までの学習活動や、学校行事をキャリア教育の観点で捉え、教職員がひとつの目標に向かって推進しなければならないと強く感じた。

(3) キャリア教育を通じた連携

キャリア教育は、学校を取り巻く環境の特性を理解し、保護者や地域社会と連携し、行わなければならない教育であり、少しでも早い段階からの学校現場への取り入れが必要とされる。

また、学校現場の目的意識が強化され、目指す方向性が一致すれば、生徒も変わり、学校が変わる教育ではないかと確信する。

引用・参考文献

キャリア教育論 ―進路指導からキャリア教育へ― 吉田辰雄 文憲堂 2005.3

就職がこわい 香山リカ 講談社 2004.2

キャリアガイダンス リクルート

「キャリア教育」資料集 ―文部科学省・国立教育政策研究所― 研究・報告書・手引編 2006.3

キャリア教育入門 ―その理論と実践のために― 三村隆男 実業之日本社 2004.10

キャリア教育が高校を変える―その効果的な導入に向けて― 山崎保寿 学事出版 2006.7

困ったときのコミュニケーション力 菅原裕子 PHP研究所 2006.11

キャリアデザイン入門[1] 大久保幸夫 日本経済新聞社 2006.3

若者はなぜ3年で辞めるのか? ―年功序列が奪う日本の未来― 城繁幸 光文社 2006.9

必読教師力アップのためのコーチング入門 河北隆子 明治図書出版 2004.9

おシゴト上手のハッピー・ヒント ハッピー・ヒント取材班 宙出版 2005.10

教師力 河村茂雄 誠信書房 2003.6

キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議の報告書 2004.1

引用・参考文献

子ども・学校・地域をつなぐコミュニティスクール 奥村 俊子・貝ノ瀬滋 2003.12
高校生のキャリアノート 全国高等学校進路指導協会 実務教育出版
目からウロコのコーチング 播摩早苗 PHP研究所 2004.7
だれにもわかるキャリア教育のテーマ50 こどもくらぶ 学事出版 2005.8
お仕事のマナーとコツ 西出博子 学習研究社 2006.3
スラスラ話せる敬語入門 渡辺由佳 かんき出版 2006.11